

46. 肝硬変症に随伴した高ビリルビン血症に高圧酸素療法が有効であった一例

沖浜裕司 梅原松臣 宮下正夫
山田和人 松倉則夫 鄭 淳
古川清憲 金 徳栄 滝沢隆雄
田尻 孝 足立憲治 森山雄吉
山下精彦 恩田昌彦

(日本医科大学第1外科)

我々は肝硬変症に食道静脈瘤を合併した症例に選択的食道静脈瘤および脾動脈塞栓術を施行し、その後に極めて頑固に遷延した高ビリルビン血症に対し高圧酸素療法を行い、急速に血清ビリルビン値の低下を見た例を経験したので報告する。

症例は、55歳男性、昭和60年2月吐血を主訴として某病院へ入院し、食道静脈瘤と診断され、同年4月23日、静脈瘤塞栓術のために当科へ入院した。入院時所見：意識清明。眼球結膜黄染。貧血なし。前胸部にクモ状血管腫を認める。腹部平坦、腹水なし。肝臓は触知せず。RBC 325×10^4 , Hb 11.0, Ht 31.5, WBC 2600, Pt 7.5×10^4 , GOT 32, GPT 29, LDH 245, AL-P 175, γ -GTP 38, T. Bil 1.7, D. Bil 0.6, Alb 3.5, T. P. 7.2, BS 85, HBsAg (-), HBsAb (-), ICG15分36.1%, L-CAT 24, Ammonia 71.4, 内視鏡検査ではCwLmF₃RC(++)であった。5月10日に血管造影を施行、経皮経肝門脈造影で胃冠状静脈が明らかに拡張蛇行しており同部を塞栓した。また、脾動脈造影では中等度の脾腫大を認め、脾動脈塞栓術を施行、塞栓率約40%を得た。

塞栓術施行後、食道静脈瘤の軽快および血小板数増加は認められたが、次第に血清ビリルビン値が上昇していき、steroid療法などにも反応せず、肝不全への移行が危惧されたため、血中酸素含量の増大による治療効果を期待して高圧酸素療法を試みた。高圧酸素療法は3ATAO₂投与、治療時間90~100分の条件で6月4日から開始し、24日間に合計18回施行した。その結果、治療開始時に10.7 mg/dℓであったビリルビン値が1.2 mg/dℓまで改善し、8UであったL-CAT値も38Uまで著名に上昇、全身状態も著しく改善した。以上、高ビリルビン血症の新しい治療法として、高圧酸素療法の可能性を示唆する1症例と考え、若干の文献的考察も加えて報告する。

47. 肝機能および血清胆汁酸値よりみた肝不全に対する高気圧酸素療法の効果

中山幸一* 八木博司* 兼松隆之**
北野正剛** 奥村 恂***

(*福岡八木厚生会病院, **九州大学医学部
第2外科, ***福岡大学医学部第1内科)

肝不全に対するOHP療法の効果について、私共はすでに昨年の本会で発表したが、今回、治療前後で肝機能および血清胆汁酸値を測定し、これら生化学的検査の面から肝不全例に対するOHP療法の効果を検討したので報告する。

対象例は、肝不全の病歴を有する肝硬変症7例で各種治療に著効を示さなかったものである。

使用した高気圧酸素治療装置は、川崎エンジニアリング社製、第2種装置で、2絶対気圧、80分の条件下で1日1回、15ℓ/minの純酸素を高圧下でマスクを用いて吸入させ治療した。パラメーターとして、治療前、治療後10回目、20回目に肘静脈より採血し、各種肝機能検査と高速液体クロマトグラフィー(HPLC)を用いて血清総胆汁酸と胆汁酸分画を測定した。

その結果、治療前とOHP療法20回施行後で肝機能を比較してみると7例中4例に改善を認め、不変2例、増悪1例という結果を得た。これに対し、血清胆汁酸値では改善3例、不変3例、増悪1例という結果を得た。従って、肝機能の変動と血清胆汁酸値の変動は必ずしも平行せず肝機能改善例の4例中2例において相関を認めなかった。その原因については今後の検索にまたねばならない。しかし、肝機能改善の4例では臨床症状の面で、脳症および黄疸の改善を各2例に認めており、特に黄疸例では2例ともビリルビン値の低下と共に皮膚癢痒感の軽減を認めた。肝機能で不変或いは増悪を示した3例は①食道静脈瘤離断術後例②黄疸が遷延した肝硬変例③肝癌合併例の各1例で、原病の進行その他によりOHP療法の効果を期待する事はできなかった。

以上の所見から、私共は肝不全例に対しOHP療法は、一応試みられるべき治療法の1つと考えており、本療法の効果判定に如何なる指標が最も妥当か今後、更に検討する予定である。